

『ソウルフル・ワールド』

2020年/アメリカ/ピート・ドクター監督作品

大人にこそ響くアニメ

会員 嘉数 英恵 (74期)

疲れたときほどディズニーとピクサーで癒されている。予測容易な展開に、ハッピーで収まりのいい結末。そんな予定調和的な舞台で主人公が成長するさまを、キャッチーな音楽に包まれながら見届ける。それがただただ心地良い。

しかし、本作はちょっと違っていた。冒頭から見せられる雇用格差に、現代社会の余裕のない空気感、夢を追う者と周囲の対立や心が壊れた人間の姿など、至る所に散りばめられたリアルな描写と問題提起は、胸をチクチクと突いてきた。

物語は現代のニューヨークから始まる。主人公のジョーはジャズピアニストとして成功することを夢見ているが、生活のために中学の音楽教師となり、退屈な日々を過ごしている。

ある日、ジョーのもとに、有名なジャズ奏者との共演の話が舞い込んでくる。夢が叶ったと大喜びし浮かれるジョーだが、うっかり事故に遭ってしまい、意識不明の状態になる。

肉体から離れソウル（魂）の姿となったジョー。気づくとソウルの姿で死の入り口に立っていた。やっと掴んだチャンスを前にまだ死ねないともがくジョーは、追いかけてくる死の入り口からなんとか逃げ切り、たまたまユーセミナー（You Seminar）と名付けられた場所に来てしまう。

そこは人が生まれる前の世界。これから生を受けようとしている幼いソウルたちが過ごす場所だ。幼いソウルたちはここで個性を備え、自分だけのきらめきを見つけたとき、地上で人として誕生するという。

この世界でジョーは異端児のソウル「22番」と

出会う。この出会いをきっかけに、ジョーは元の体に戻るチャンスを得られるが、誤って自分の体ではない別のものにソウルを入れてしまう。元の体に戻り長年の夢だったコンサートへの出演を果たしたいと奮闘するジョーと、思いがけずジョーに付き合う羽目になった22番。奔走するなかで、ふたりは次第にきらめきとは何かを知っていく。

拙い紹介のせいで、「どうせよくある『幸せはあなたのすぐそばにある』とか『ありのままがいい』系でしょ」と思われるかもしれないが、本作はありきたりなところには行き着かない。ジョーと22番が見つけたきらめきの正体は、これまでのディズニーやピクサーでは描かれていなかったように思うし、同じ答えを得ながらも対照的な選択をするジョーと22番の姿は、この映画が発するメッセージの奥深さを感じさせる。それでいて、いつもの癒しも忘れずに提供してくれる。計り知れないほどの力を持っている作品だ。

本作は新型コロナウイルスの流行により、映画館で上映されることがなかった不遇の作品でもあるが、多くの人の目に触れずに埋もれていくのはあまりにももったいない。

ジョーと22番のそれぞれのストーリーは臆病な者には喝を入れ、疲弊した人には憩いを与えるだろう。何者でもないことの尊さに気づかせてくれるし、心を守るヒントも教えてくれる。子供っぽいやつとアニメを遠ざけている人でも、練られた世界観と脇を固める高尚なキャラクターたちには知的な好奇心が刺激されるはずだ。あなたの心にも残る映画だと思う。